



イタリアの大聖堂への落書き事件をきっかけにいくつかの落書き騒動が世間を騒がせた。壁に書き散らされた絵や文字はアートと言えるのか、落書き研究の第一人者が考察する。

武蔵工業大学准教授

小林茂雄

このところ落書きが世間を騒がせている。6月下旬に、フィレンツェのサント・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の展望台の柱に描かれた日本の女子短大生による落書きが報道されてから、芋づる式に他の落書きが指摘され、所属組織を巻き込む大騒動となった。落書きした短大生と学長は現地に赴き謝罪し、また新婚旅行で訪れたときに名前を記した高校の野球部監督は6月

末に解任された。同じく聖堂への落書きが見つかった関西の大学生は停学処分にされた。さらに7月1日には上越新幹線の車体に、スプレーで大きく「Hack」と描かれた落書きが見つかり、その新幹線は運休となり500人に影響が出た。新幹線への落書きは、東京都北区にある車庫において深夜に描かれたものと推測されている。

これ以外にも、広島県宮島の原始林

に100カ所以上描かれた赤い落書きや、山口の錦帯橋の橋脚などに描かれた落書き、通天閣のらせん階段に描かれた観光客やカップルらの落書きなどが相次いで報道された。どうしてそれほど急激に、落書きは増えてしまったのだろうか。

徴というわけではない。単にある告発をきっかけに、クローズアップされたに過ぎない。

しかしそれでも私たちの身のまわりや街中には落書きが数多くあることは確かである。ではどうして、そんなに落書きは多いのか、それは犯罪ではないのか、落書きはアートなのか。そういう問題について答えたい。

観光地に落書きするのは そこに来た証を残すため

まず、観光地の落書きについて。名所旧跡などの建造物の柱や壁、天井などにマジックで名前やニックネームと日付を書くというパターン。カップルの場合はハートマークや相合い傘を添えたりしている。古いものでは、カンボジアのアンコールワットの壁に描かれた江戸時代の武士・森本右近太夫による落書きが有名だ。「千里の海を越えてはるばるやってきた」というような文章が達筆な字で記されている。

こういう落書きをする動機は明確であり、ここに来たという証をその場所に残したいからである。あまりの絶景や美しさに感動したり、困難を乗り越えてようやく到達したりしたときは、気分が高揚するものだ。その瞬間、ここにいるということを特別なものと感

じたり、またその場所に対する愛着心が一気に高まったりする。そういうとき、立ち去る前になにかしらの証を刻みたくなるものだ。カップルだと永遠の愛を感じてより盛り上がるに違いない。自分を入れた記念写真を撮る心境もほとんど同じだし、自分へのお土産を買ったりするのも似たような心境だろう。

この手の落書きはあくまで個人的なもので、人に見せたいとかアートでやっているとかという要素は全くない。他愛もない気持ちで描かれたものがほとんどで、他の落書きに触発されて描いてしまったということも多い。ただし軽はずみな気持ちであっても、器物や景観を壊すような落書きは許されるべきではない。高ぶった気持ちをいかに表現するか、あるいはじつと心の中に収めるのか、そういうことを考えるのが大人というものだ。



今年の7月1日、上越新幹線の車体に大きく描かれた「Hack」という落書きが発見される事件があった。

ニューヨークで生まれた グラフィティという文化

次に、建物の壁やシャッター、電車、高架下などにスプレーやマーカーで描かれている落書きについて。スプレーで壁に描く落書きというのは、1980年代くらいまでは暴走族の落書きと決まっていた。団名やマークを描いたり、「夜露死苦（ヨロシク）」「愛羅武勇（アイラブユー）」などの難しい漢字をレタリングしながら壁に描いたりしていた。目立ちたいということ、なわばりを示したいということ、反社会的な態度がかっこいいということなどが背景にあった。

また、暴走族ではないメッセージ型の落書きが一時的に広がるということもある。社会や制度に不満を持つ若者が、熱い思いを人々に訴える手段として落書きに走るものである。1960



マスターピース (ピース)



スローアップ



タグ

年代の学生運動では、大学校舎の壁や塀などに、思想に基づくものから意味不明なものまで様々な落書きがされた。1989年まで西ベルリンを囲っていたベルリンの壁にも、平和を願う思いや政治的なメッセージなどが無数に描かれ、そうした落書きが徐々に色鮮やかな壁画へと発展していった。

これらに対して、1990年代から日本が増えだしたのは「グラフィティ」と呼ばれるタイプの落書きである。グラフィティはもともと、1960年代末にニューヨークのサウスブロンクスを中心として発祥したストリートアートである。貧困層にある、自分の存在を見失いがちな若者たちが、自分が街に在るという証を残そうと、スプレーなどでネーム（愛称）を壁や電車の車体に描きはじめたのが始まりである。電車に描いたのは、自分が動かなくても絵が勝手に動いてくれるからであ

せる必要があるため、手の込んだ絵を描いている時間がないというのが大きな理由である。もうひとつは、いま現在ストリートアートとしてやっている人たちはほんの一部で、たいていの落書きは面白半分、ストレス発散のためだけにやっているものだからだ。そこに確固とした信念や意欲はなく、何かを表現したいということもそれほどない。グラフィティが発祥した背景などに関心も共感も持たず、ただそういったことが流行していることに便乗したいと思っただけである。

グラフィティに本気で取り組み、独自の表現を追求しようとしている人たちは、タグやスローアップだけが蔓延しているこの状況を快く思っていない。そういう落書きと自分たちのグラフィティとを一緒にされることに嫌悪感さえ抱いている。確かに力のあるピースと、簡素なタグとは全く別物だ。

り、多くの人に見てもらえるからである。そうした落書きは他の若者たちを刺激し、だんだんとエスカレートしていった。描写方法としても様々なものが生まれて、互いに技を競い合うようになり、表現のレベルが高まった。またヒップホップの普及と同時に、グラフィティはニューヨークを越えて、1980年代にはアメリカ全土へ、そして世界中へと広がっていった。

絵のタイプにはいくつかあり、十分時間をかけて描く手の込んだ描写を「マスターピース（またはピース）」と呼び、大きな文字の羅列を比較的短時間で描くものを「スローアップ」、ネームだけをちょこちょこ数秒で描いただけのものを「タグ」という。

街で見かける落書きの多くはタグだ。たまにスローアップがあり、ピースなんてほとんどない。違法な行為なのでできるだけ短時間ですばやくすま

しかしどちらも許可なく描かれたものであれば、それらは落書きとしてひとくくりされるのは仕方がない。落書きと呼ばれて腹を立てるのは、自分の行為にそれだけ覚悟ができていないと言えるだろう。

落書きがアートとして 認められたケースもある

「落書きとアートの境界はどこか？」と問われたり、「これは落書きではないアートだ」「落書きは犯罪であってアートではない」という主張を耳にしたことがある。しかしだいたい、落書きかアートかというようにどちらかに分類できるようなものではない。落書きの定義にもよるが、アートとは基準が違っている。ここでは「落書き」は許可なく描かれた違法な描写であるということにしておく。そうすると、絵が上手いか下手かに関わらず、許可

がないものは落書きになるし、許可を受けたものは落書きにはならない。ではアートとは何か。何がアートであるかいうことは、人による主観で決まるものである。それは、描く人と見る人の2通りの立場がある。描く人が美を追求するなど芸術活動としてやっていれば、それにはその人にとってアートである。また、どういう目的や意図で



イギリスの匿名芸術家・バンクシーの落書きは、高い描写力と優れたユーモアを兼ね備えており、人々の根強い支持を集めている。

描かれたものであっても、それを見た人が美術的な価値を見出せば、その対象はその人にとってアートになる。すなわち、アートかどうかということとは、同じ絵であつても人によって異なるのである。そして、多くの人が共通して芸術的価値を見出せば、社会的にアートとして認められる。

アートとして認知されている最も有名な落書きは、イギリスの芸術家であるバンクシー（Banksy）のものである。建物の壁や道路、美術館内部にゲリラ的に絵を描いたりメッセージを残したりするもので、彼は犯罪行為としての落書きを繰り返している。もちろん本名や顔などは公表しておらず、メディアに出ることもない。バンクシーの落書きは、場所の特徴を読み取った上でなされる斬新なもので、高い描写力と、思わず笑ってしまうようなユーモア性を兼ね備えており、市民

からは圧倒的な支持を得ることが多い。大抵の落書きはもちろん当局によって消されるのであるが、描かれたものが4000万円を超える高値で取引されたり、バンクシーの落書きだけは保存するように指示しているプリストル市のようなところもある。市内の会社では観光ポイントとして積極的に宣伝している。

繰り返すが違法行為としての落書きは許されるべきものではなく、犯罪行為として取り締まられるべきである。ほとんどの落書きは制作意図も表現も稚拙で、アートと感じられるようなものはない。しかしそれでも、落書きの中に芸術性を見出してしまうことがあるのも事実である。それもやっかいなことに、その絵の描写力というものだけでなく、ゲリラ的に勝手に描かれたものであるということと関係してしまっている。ある種の過激さや反社会性

や予定調和的でないところが、作品の価値を相乗的に高めることになるのだろう。こうした落書きも、バンクシーなど一部の特定のアーティストの行為に限定すれば問題はないことであるが、そういうわけにもいかず、無許可で描くことが芸術の条件だと勝手に勘違いする若者を生んでしまうことになる。上記のプリストル市でもそのことに悩んでおり、誤解を受けないようにするため、プロジェクトチームをつくって何度も議論を重ねている。

落書きが増えるほど 周辺地域の治安が悪くなる

ここで犯罪としての落書きが持つ影響についても記しておこう。建物の壁などに小さい落書きが1つくらいあっただけでは、それ程目立つものではないため、景観を大きく破壊しているわけではないし、犯罪としても重いもの

とは言えない。しかし、何も落書きがないところに1つ描かれるだけで、他の落書きを非常に描かせやすい状況をつくる。汚すことに対する心理的な抵抗が小さくなるためと、落書きをしようと思っていない人に刺激を与えて、自分もやりたいと思わせるためである。ほんの小さな1つの落書きが呼び水となって、その周辺が落書きで蔓延されることにもなってしまう。そしてそれは、犯罪の跡を残しているということになっていくのだ。

落書きがある程度増えてしまうと、その地域の住民や利用者は、「綺麗にしよう」とすることをあきらめ、環境維持活動を放棄するようになる。場所に対して関心を持たないような状態は非常に危険である。ゴミの放置などの環境の悪化が連鎖的に起こり、他の反社会的な行動や凶悪な犯罪を引き起こしやすい状況をつくる。軽微な犯罪を

放置することが殺人や暴行の増加につながることは、「割れ窓理論」と呼ばれている。こうした犯罪の連鎖を引き起こさないようにするためには、できるだけ初期に食い止めることが重要である。その試みがアメリカでなされてきた。有名なのはニューヨークのもので、1990年代に地下鉄のキセルや落書きなどの軽犯罪だけを取り締まることによつて、地下鉄内の殺人や暴行などの凶悪犯罪が大幅に減少した。

落書きを放置しておく、地域の治安が悪化し、街のイメージが悪くなり、その結果、居住者が減り、極端な場合はスラム化していく。そのため、アメリカやヨーロッパでは地域を守るものとして、真剣に排除していかねばならない問題となっている。落書きを抑えるため、取締りを強化し刑を重くすることと同時に、未成年者へのスプレー塗料の販売を法律で禁止している

街も多い。また落書きへの対処は、できるだけ素早い方が効果的である。落書きを発見してから消去するまでの時間と落書きの再発率を調べたところ、48時間以内に消去すると再発率は非常に低く抑えられ、3カ月以上放置した後の消去では再発率は高くなったことが報告されている。そのため、役所などに24時間通話可能なグラフィティ・ホットライン（落書きを通報するため専用電話番号）を設け、通報があったからから48時間以内に行政が責任を持って消去活動にあたらうとしている街もある（セリトス市、フェニックス市、サンノゼ市など）。

日本ではまだ、落書きの多い地域と凶悪な犯罪が発生する地域とが一致しているわけではなく、また落書きする人々の大部分は普通の高校生などである。ただし、日本のグラフィティ・チームはアメリカより20年遅れており、

この状態を放置していると、アメリカの都市部のような凶悪な犯罪が起こる状況をつくってしまうことになるかもしれない。

犯罪性のない落書きが街を豊かにしていく

屋外の壁などに大々的に落書きを描いた犯人は、おそらくその行為によって快感を覚えたに違いない。悪いことをしているという快感ではなく、大きな対象に描くことの快感である。それはノートなどに小さく落書きすることは決定的に異なる。私はもちろん違法な落書きをしたことはないが、シャッターや高架下の落書きをペンキや溶剤で消去したり、消した後に住民と一緒に絵を描いたりする活動を行ってきた。そのときの、大きくペンキを塗るといふ気持ちよさは、他ではなかなか経験できないものだ。スケールの大き

さが、身体全体を使って描写するということでダイレクトに伝わってくる。

屋外空間で合法的に自由に絵を描ける場をつくるというものに、リーガルウォール（フリーウォール）というものがある。これは、公共空間の壁などに、誰もが自由に何を描いてもよいというエリアを設定するものである。グラフィティの流行に応じて、1980年代にアメリカ各地で、1990年代にヨーロッパの都市で導入された。若者が表現する要求を満たす場所をつくることによって、限定されたエリア以外の違法な落書きを撲滅しようと計画されたものである。しかし残念ながら、リーガルウォールは、初期的には成功しても、長期的には失敗に終わる（落書きが逆に増えてしまう）ことが多かった。その原因として、壁面がすぐに埋まって絶対数が不足すること、タグやスローアップといった簡素な落書き

が蔓延すること、他の場所で落書きするための練習場として利用されること、落書きする刺激を一般の若者に与えることなどが挙げられている。そのため、現在もリーガルウォールを設置しているところは非常に少ない。

それでは、リーガルウォールのような自由に絵を描ける場をつくりながら、落書きを増加させないようにし、かつ醜悪な絵によって景観を乱さず、地域に活気を与えられるような方法は

ないだろうか。そのためには、自由だといっても上手い絵が描かれる必要があるし、また落書きする人たちを取り込んだ活動にしていく必要があるだろう。確かに、犯罪ではないグラフィティというのも街にはいくつもあり、合法的な壁画をつくっていくという試みもみられる。しかしその多くは、あらかじめ指定されたアーティストによって描かれるもので、一般の人たちが自由に参加できるようなものではない。また一方で、商店街や



リーガルウォール

高架下で制作する壁画を一般に公募したこともある。応募は数多く集まるのであるが、全ては善良な市民によるものであり、違法にグラフィティを描いているような者が応募してきたことはなかった。彼らは街に絵を描くことの楽しさを知っ

ていても、社会に対する警戒感を強く持っているため、公の場に出てこうとはしない。そのため、落書きを合法化していく活動にはなかなか結びつかない。グラフィティの持つエネルギーを社会に活かすためには、超えなければならぬハードルがまだある。

印刷された大きな壁画やプロが広告のために描く壁画は、それがたとえ上手くても、綺麗だという印象だけで終わってしまう。それに対して、ゲリラ的に描かれた落書きは、見る人に恐怖心を与えたり、楽しませたり、考えさせたりというように、感情に揺さぶりをかけることが多い。人の思いや行為を伝えられる絵というのは、街を豊かにしていく手段となりえるのだ。落書きの犯罪性を取り払って、誰もが楽しく絵を描けて、それを楽しく眺められる、そんな街ができたならなんて素晴らしいことだろう。

小林茂雄(こばやし・しげお)●1968年神戸生まれ。東京工業大学建築学科卒業。武蔵工業大学建築学科准教授。建築や都市の光環境、景観問題、落書きやストリートアートについて研究している。